

## アンチ＝クリマクスによる絶望の治療について

行武宏明

### 序

アンチ＝クリマクス Anti-Climacus によれば、「絶望」(Fortvivelse) とは、自己意識としての自己が自身を措定した絶対的他性としての自己に対して自由に為す、誤った態度決定による自己の不均衡である。あるいは、絶望とは、自己が自己自身を、実際のところは嫌悪しているにも関わらず、自己自身を無にすることができないという苦悩である。

自己は絶望を如何にすれば治癒することが出来るのか。それは、「誤った態度決定」を「正しい態度決定」に変えればよい。では、正しい態度決定とは何か。アンチ＝クリマクスによれば、正しい態度決定とは自己が自身を措定した絶対的他性に対して謙虚にその力を受け入れること、である\*1。

本論文はアンチ＝クリマクスによって提示された、絶望という「死にいたる病」が彼の（著者として出版された\*2）二つの著作、すなわち『死にいたる病』（1849）\*3と『キリスト教への修練』（1850）によって如何に治癒されて

---

\*1 このことは、アンチ＝クリマクスが定義する絶望の根絶した状態、すなわち信仰の規定から推知することができる。その信仰の定義とは、「自己自身に関係し、自己自身であろうと欲することにおいて、自己は自己を措定した力の内に透明に gjennemsigtigt 根拠をおく」(SV 15,74) である。

\*2 キェルケゴールはこれら著作を実名で出版するつもりだった。しかし、結局は、著者アンチ＝クリマクス、刊行者セーレン＝キェルケゴールという形で出版した。

\*3 本論文では、キェルケゴールの著作は *Søren Kierkegaard's Samlede Værker*, udg. af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, København, Gyldendal, 1962–1964 (原典第三版) から引用し、巻数と頁数を示した。また日誌・遺稿は *Søren Kierkegaards Papirer*, udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, 2. udg. ved Niels Thulstrup, København, Gyldendal, 1968–1978 (日誌・遺稿集第二版、略号 *Pap.*) から引用し、慣例に従って、巻数と整理番号で示した。さらに一つの整理番号が数ページにわたる場合は日誌・遺稿集

いるか、言い換えれば、これら二つの著作が絶望する者の自己意識を如何に変化させて、絶望の治療に寄与しているのかを明らかにするものである\*4。まず、本論文の位置づけを、絶望について考察する他の研究文献との対比を通して行う。続いて、本論文のとり考察方法を提示する。

## 本論文の立場

本論文の立場を明らかにするために比較の対象として用いる研究文献は、大谷長氏著『キェルケゴールの自由と非自由』において絶望を考察対象としている第三部第三章「「非自由」性の必然的理念としての絶望」と中里巧氏著「悪魔的絶望と覚醒」である。

大谷長氏は絶望を絶望の治療（信仰）の為の不可避的不可欠な一契機として捉える。大谷長氏によれば、絶望は「非・自由」性を本質的特徴とする、自己（関係）における不均衡である。確かに自己（関係）における不均衡である点で、絶望は否定的なものである。しかし、非自由は自由を、また不均衡は自己（関係）を根絶はしない。絶望において、自由は常に否定的に働き、自己（関係）は誤った関係として常に存立している。従って、絶望は肯定的なものへの可能性でもある。何故なら、絶望は、非自由から自由への、また自己（関係）の不均衡から均衡への「転回」（あるいは「衝転」）が生起し、自由と自己（関係）の均衡が成立する可能性を常に内包するからである。

では、上記の転回、すなわち絶望を治療するところの否定的なものから肯定的なものへの移行は如何にして生起するか。大谷長氏はキェルケゴールの言葉を精査し、以下の如く述べる。転回は、絶望する者が困窮の極致において否定的なもの本来の姿を知り、それに対して適切な態度をとることによって起こる。絶望の展開と共に絶望する者の苦悩も増幅する。苛烈さを

---

のページを付した。

\*4 キェルケゴールは絶望の「根本における治療」(Helbredelsen i Grunden)のためにこれら著作を執筆、出版した。この事情は、1848年のキェルケゴールの日記(VIII<sup>1</sup> A 558, s. 258)から読み取られる。

増す苦悩の中で、絶望する者は自身を絶望させている絶対的他性（神）を知り、そして苦悩の極点において、自己（我）を放棄して全てをこの絶対的他性（神）に委ねる。これが転回であり、ここにおいて絶望は治癒される。

中里巧氏の論文は絶望の治癒に関して大谷長氏が提示した考えの多くを踏襲する。中里巧氏によれば、『死にいたる病』において、アンチ＝クリマクスは誠実（肯定的なもの）である故に実存は絶望（否定的なもの）に陥るという（逆転の）レトリックを潜在的に働かせる。そして、この潜在的なレトリックはまさに誠実故に絶望に陥る読者に「私は悪魔ほどに誠実でありうるだろうか」と疑問を抱かせるであろう。そして、読者は、自身が悪魔の如く誠実に絶望することの不可能を悟り、絶望から解放されるであろう。絶望の治癒に関してここで働く考えは、絶望は肯定的なものと否定的なものの弁証法的統一であり、「転回」（中里巧氏の論文においては「覚醒」が相当する）が絶望を治癒するというものである。この考えは上記した大谷長氏の提示する考えと共通する。

しかし、大谷長氏の立場と中里巧氏の立場には相違がある。大谷長氏は転回への過程の構造をキェルケゴールの言葉についての精査から導出する。それに対し、中里巧氏は転回への過程の構造をキェルケゴールの言葉とその読者の関係から予測的に導出する。つまり、転回への過程の構造を導出する方法において、大谷長氏の立場と中里巧氏の立場は異なる。

本論文の立場は中里巧氏の立場と共通点をもつ。本論文は大谷長氏の提示した問題——転回への過程の構造の導出——を中里巧氏の提示した立場——キェルケゴールの言葉と読者の関係を配慮する——を基に解決することを試みる。

しかし、本論文の立場と中里巧氏の立場には相違がある。本論文は中里巧氏のように転回への過程の構造をキェルケゴールの言葉とその読者の関係から予測的に導出するのではなく、本論文執筆者自身が読者としてキェルケゴールの言葉と対峙し、そこから転回への過程の構造を導出する。つまり、転回への過程の構造を導出する方法において、中里巧氏の立場と本論文の立場は異なる。

以上の考察から、本論文の立場を約言すると以下ようになる。本論文の立場は大谷長氏の提示した問題を中里巧氏の提示した立場を踏まえた独自の主観的方法をもって解決することを試みるものである。

## 考察の方法

考察の方法としては、読者との関係を配慮して、アンチ＝クリマクス名義の著作をその叙述を追って考察するというものである。著作を読むという、最初のページから始まり最後のページで終わる一つの体験が読者を如何に動かし、その結果読者が如何なる認識を獲得して絶望を克服したかを考察、提示するために、本論文は、論文執筆者が一読者としてこの著作と関係し、その結果獲得された効果を著作の叙述に従って提示するという方法をとる。いわば、論文執筆者がリトマス紙となって、この著作の絶望に対する効果を実験的に考察し、それをケルケゴールの著作を追って提示する。考察の順序としては、執筆、出版の順に従って『死にいたる病』、『キリスト教への修練』である。それでは考察に入る。

## 第一節 『死にいたる病』

### 第一項 『死にいたる病』 第一部

この著作の第一部<sup>\*5</sup>は絶望についての概念的考察から始まる。第一部 A-A において、自己の定義を基にした絶望の定式と絶望の根絶した状態の定式が示され、第一部 A-B において、可能性－現実性の対概念に即した絶望の定義が示される。続く第一部 A-C においても、アンチ＝クリマクスは絶望についての規定を提示する。しかし、ここでの提示は単なる概念的規定とは異なる、例示や文学的表現を用いた、絶望についてのより具体的理解を促すものである。アンチ＝クリマクスは絶望を以下の如く描出する。

<sup>\*5</sup> アンチ＝クリマクスは、Afsnit, Kapitel, Tillæg, Nr., §, A, B, C, α, β, §, 1, 2, I ~ VII 等をもって著作内の区分をする。本論文は、Afsnit を部、Kapitel を章、Tillæg を付録、Nr. を巻、§ を節と訳出し、英数と数字はそれぞれそのまま表記する。

絶望の苦悩は、まさに死ぬことができないことである。この状態は、絶望する者が横たわって死という重荷を背負い、そして死ぬことができない時の危篤の状態と多く共通するものである。(SV 15, 77)

アンチ＝クリマクスによれば、人間は耐えきれぬほどの危険を前にしたとき、あるいは自身を全くの空虚と感じるとき、生ではなく死を望む。しかし、自己を支配するもの、すなわち内在する永遠的なものは死ぬことを許すことがない故に人間は生きざるを得ない。この状態が絶望である。つまり、絶望する人間は、生きることも（何故なら危険は目前にあり、あるいは自身は空虚であるのだから）、死ぬことも（何故なら内在する永遠的なものは死ぬことを許さないのであるから）出来ずに完全な無力の内にある、一個の苦悩である。

絶望についての以上の規定を含む第一部 A の叙述によって、読者は絶望についての概念的、かつ実践的理解の余地を有する、弾力と幅を備えた理解を得ることが出来る\*6。

知の反対の立場は無知である。絶望に関して言うのならば、絶望についての知と反対の立場は、精神としての自己について無知であり、それ故に内在する永遠的なものについても無知であって、ただ時間性、有限性の中を一喜一憂しつつ生きて死んでいく（肉体的な意味で）、世俗に浸りきった立場である。

アンチ＝クリマクスは第一部 A-B 以降、絶望について無知の立場、すなわち俗的な人間を否定的に提示する。アンチ＝クリマクスによれば、絶望について無知である俗的な人間とは「人生を無駄にする」人間、あるいは誤謬の中で安心を得、実のところは絶望しているにもかかわらず、自らの有様に無知で、それ故に絶望から救われて永遠的なものを見出す可能性を全く欠く「小石のようにとぎ減らされ、流通貨幣のように流通する」、「世間に身売りしている」人間である。

---

\*6 絶望についての概念的理解がここで終わってしまうわけではない。それは、この著作を一貫する。

上記のような、絶望について無知である俗的な人間に対する苛烈な叙述によって、アンチ＝クリマクスは読者に対して絶望に自覚的に関係する立場（以下永遠的なもの）と絶望に無知であり続ける立場（以下、俗的なもの）の二つの立場<sup>\*7</sup>を提示し（すなわち「あれかーこれか」を提示し）、そして後者の立場を否定的に提示することによって、読者が俗的なものを嫌悪しつつ離反して、永遠的なものへと向かうことを促している。

読者は永遠的なものへと促される。しかし、アンチ＝クリマクスは読者を裏切る。続く、必然性の絶望についての考察（第一部 C-A-b-β）において、アンチ＝クリマクスは永遠的なものの範疇に属する「信仰」を人間的可能性の現実的な絶滅後に初めて問題とされうるものとして提示する。

信じる者は（自身に起こった事のうちに、あるいは自身が為したことの中に）人間的な意味での自身の破滅を見、かつ理解する。しかし、彼は信じる。それ故、彼は破滅しない。彼は如何に自身が救われるのかを全て神に委ねる。しかし、彼は、神にとってはすべてが可能であることを信じるのである。（SV 15, 96）

ここでアンチ＝クリマクスは信仰を人間の力を遥か超えたものとして提示する。アンチ＝クリマクスによれば、信仰とは絶望的状况のなかで自身の絶望を確信しつつ同時に為される、自身の救いに対する確信である。ここから明らかになる、信仰に関する二つの要素、すなわち自身の破滅を確信する程の絶望的状况に陥ること、さらにその状況下で矛盾する確信を同時に抱くこと、は信仰が人間的領域を超える高次のものであることを表現している。

永遠的なものの範疇に属する信仰が上記の如く示されることによって、俗的なものから離反し永遠的なものへと方向付けられた読者は永遠的なものか

<sup>\*7</sup> アンチ＝クリマクスは、絶望を身体的病と類比的なもののみならず「通俗的な考察」、またそうした見解をもつ「多くの者」、「大衆」を永遠的なものとの関係においては悲惨な状態にあるものとして提示する。本論文は、著作全般にわたって否定的に提示されるこれらの立場を総括して「俗的なもの」と称する。そして、俗的なものと対照的に提示される立場、すなわち自覚的に絶望と関係して、永遠、神、信仰、罪等と関係する立場を総括して「永遠的なもの」と称する。

ら押し返される格好となる。何故なら、信仰は読者にとって高次のものであり、従って未知のものであるからである。それ故、読者は俗的なものから嫌悪と共に離反しつつも永遠的なものに安らぐことも許されない。つまり、第一部 B から第一部 C-A-b- $\beta$  の叙述の中で、アンチ＝クリマクスは読者を永遠的なものと俗的なものとの狭間で動揺させる。

続く第一部の最後、第一部 C-B においても上記と同様の事が繰り返される。まず、アンチ＝クリマクスは読者を俗的なものから嫌悪的に離反するよう促す。アンチ＝クリマクスは正確には絶望の名に値しない絶望的無知を、そして、絶望の強まった形姿として「ある程度の反省を含んだ絶望」について考察する。これら絶望の形姿は、結局は俗的なものに属し、従って永遠的なものへと高まる可能性を欠くものとして否定的に提示される。これら俗的な絶望の否定的提示によって、読者はますます俗的なものから嫌悪的に離反し永遠的なものへと自身を方向付けることを促される。

続く第一部 C-B-b- $\alpha$ -2、C-B-b- $\beta$  において、アンチ＝クリマクスは永遠的なものの範疇に属する二つの実存形態、「閉じこもり」と「反抗」を提示する。「閉じこもり」は、絶望が自身の有様を意識することによって生じる絶望の形姿である。閉じこもりは自己自身を憎んでいる、しかし同時に愛してもいる。そして、閉じこもりは、(無邪気で単純な) 周囲の人々を軽蔑と共に退けて孤立する。閉じこもりには、憎むことと愛することの動揺から解放されること、すなわち安らぎはない。何故なら閉じこもりは矛盾の中に生きているのだから。そして、閉じこもりがあらゆる他人との関係を拒む以上、その緊張が緩む可能性はないのだから。そうした状態にある閉じこもりには、常に自殺の危険が付きまとう。

「反抗」は、閉じこもりがさらに自身の有様を意識することによって生じる絶望の形姿である。反抗は自身を恣意的に処理しようとする。しかし、自己を統べる力は恣意的な自己の力を超えているのだから、反抗の試みは不可避免的に挫折する。反抗は苦しみを負う。そして、反抗はこの苦しみをもちて自身を統べる力に対して異議申し立てをする。反抗は苦しみが取り除かれることを望まない。何故なら、それが反抗の異議申し立ての根拠であり、同時

に反抗自身の根拠でもあるのだから。反抗は自身の苦しみと共に全人世を憎むことでのみ、自己自身である。

これら閉じこもり、反抗という実存形態は恐ろしい状態である。さらに、ここにはこれら絶望を回避する方法は十分に提示されない。永遠的なものの範疇に属するこれら実存形態が上記の如く提示されることによって、読者は永遠的なものから引き離される。何故なら、この得体のしれない状態と回避する方法の無提示は読者を不安に陥れる未知のものであるからである。つまり、第一部 C-B においても、アンチ＝クリマクスは読者を永遠的なものと俗的なものとの狭間で動揺させる。

## 第二項 『死にいたる病』 第二部

続く第二部は（唐突に）罪の定義から始まる。

罪とは神の前で、あるいは神の観念を抱きながら絶望して自己自身であろうと欲しないこと、もしくは絶望して自己自身であろうと欲することである。それ故に罪は強められた弱さもしくは強められた反抗である。つまり、罪は絶望の強まりなのである。(SV 15, 131)

「神の前での自己」。この規定が絶望と罪とを区別する。この規定を人間は概念的に把握することができるだろうか。アンチ＝クリマクスによれば、それは不可能である。

『死にいたる病』第二部は概念的には把握不可能な、読者にとっては未知の要素——罪——から始まり、罪を中心に展開する。アンチ＝クリマクスによれば、罪は絶望の強まったものである。従って、罪は絶望に自覚的に関係する立場である永遠的なものの範疇に属する。つまり、罪の定義から始まり、罪を中心に展開する第二部は永遠的なものにおける未知の要素を強調するものであることが理解される。

続く第二部 B-A において、上記の「神の前で」、罪、信仰という永遠的なものにおける未知の要素に加えて、新たな未知の要素が付け加わる。それ

は、「一貫性」である。

一貫性とは、あるものが連続の中で自らを不変的に維持することである。そして、罪を継続させる力はこの一貫性への執着である。罪人は自己自身を一貫させるために、それを損なう恐れのあるものを排除しつつ罪人であり続けようとする。アンチ＝クリマクスによれば、この一貫性への執着が罪を継続させ深めるのであって、罪の継続、深化において罪人の意思は全く関係ないかのようである。

さらに、アンチ＝クリマクスは一貫性への執着が信仰者（善）においても妥当すると言う。信仰者（善）と罪人（悪）の根底でそれらを維持する力が同じだと言うアンチ＝クリマクスによれば、善のもとにある人間、悪のもとにある人間は方向が違うのみで、本質的には同じであるかのようである。もし、善の力が悪の力に優位しているのならば、結局悪は駆逐される。また、善の力と悪の力が本質的に異なるのならば、悪は駆逐されないまでも、少なくともその支配を妨げる方法は存在する。しかし、善の力と悪の力が本質的に同じならば、悪の力を駆逐するか、その支配を妨げることはできない。何故なら、両者は常に反転して対立するものに移行するからである。

上記の如く提示される、罪人の罪を深化させ、そこにおいては善と悪とが同等であるような一貫性は、先述の閉じこもり、反抗という実存形態と同様に得体のしれないものである。何故なら、一貫性において、読者は絶望が罪へと、そして罪の深化へと不可避的に展開するように、またその展開を妨げるいかなる方法もないように考えるからである。従って、かの実存形態と同様、一貫性は読者を不安に陥れさせる未知のものである。

ここで重要なことは、ここで未知なるものとして提示された一貫性が罪を継続させるものとして提示されていることである。一貫性は罪の範疇に属するものであり、従って永遠的なものの範疇に属する。つまり、一貫性は永遠的なものにおける未知の要素である。

続く第二部 B-B において、アンチ＝クリマクスはさらに強度を増した罪の形態であり、かつキリスト教と緊密な関係をもつ「罪の赦しにたいする絶望」について述べる。アンチ＝クリマクスによれば、キリスト教の本質は神＝人

の教説による、弁証法的な神と人間の遠近法に存する。神＝人の教説はそれぞれの人間を神の前に立たせ、かつてないほどに両者を接近させる。しかし、神はそれぞれの人間に罪を宣告することによって、かつてないほどに両者を遠ざける。無限の接近が同時に無限の乖離を意味する神と人間との弁証法的な遠近法の基で、キリスト教は神と人間を（再び）結びつける点に、その本質がある。つまり、キリスト教において、神は人間に罪の赦しを提示して人間を自らの下に引き寄せようとする。ここに、キリスト教の全てが集中する一点が存する、すなわち罪の赦しを信じるか、それとも躓くか、の「あれか—これか」が存するのである。そして、第二部 B-B において問題となる、罪の赦しにたいする絶望とはこの「あれか—これか」において躓く実存形態である。

上記の如く罪とキリスト教との緊密な関係が強調されることによって、罪は未知の要素を増す。何故なら、キリスト教の本質である神＝人の教説は悟性的理解を拒絶する絶対的逆説であるからである。つまり、ここでアンチ＝クリマクスは永遠的なものにおける未知の要素をさらに強調する。

以上示した、『死にいたる病』第二部において示される、永遠的なものにおける未知の要素——罪、一貫性、キリスト教——の前で、永遠的なものと俗的なものの狭間で動揺している読者は戸惑うであろう。そして、続く第二部 B-C において、戸惑う読者を一喝するように、アンチ＝クリマクスは以下のように言う。

おお、わが友よ、あなたはこの人生において、今までいったい何を試みてきたというのだろうか！君の頭脳を引き締めなさい、一切の覆いを払いのけて、君の胸の中にある感情の臓腑をさらけ出しなさい、読むものからあなたを引き離す、全ての頑なさを壊しなさい、そしてそれからシェイクスピアを読みなさい——そうすれば、あなたはいくつかの葛藤の前で震えるはずだ。(SV 15, 176)

この一文（あるいは一喝）は、第二部において強調される、永遠的なものにおける未知の要素の意味を変化させる。つまり、この一文によって読者

は、理解が困難なことの責任はアンチ＝クリマクスによる叙述にあるのではなく、自己自身の経験と想像力の不足に、すなわち生きることの不足にあることに思い至るのである。さらに続けて、アンチ＝クリマクスは沈黙と自己吟味を説く。それによって、上記の一文を踏まえた読者は第二部の（あるいは著作全体の）永遠的なものにおける未知の要素に対して謙虚になることを学ぶ。

しかし、アンチ＝クリマクスはそうした読者に「今」キリスト教（永遠的なもの）に対して態度決定することを迫る。読者は戸惑う。何故なら、永遠的なものは未知の要素を多く含み、かつ、読者は「今」その未知に対して謙虚になっているのだから。そうした読者の戸惑いと関係なく、アンチ＝クリマクスは著作の総括をして、最後に信仰の定義を繰り返して（まるで結び目のように）、この著作を終えてしまう。後にはただ戸惑う読者だけが取り残される。

以上、『死にいたる病』を、読者との関係を配慮して考察した。この考察から理解されることは、『死にいたる病』が読者を既知のもの（俗的なもの）と未知のもの（永遠的なもの）との狭間で動揺させ、永遠的なものへと謙虚に向かうことを促す著作である、ことである\*8。

## 第二節 『キリスト教への修練』

『キリスト教への修練』は三巻から構成される。そして、この著作は多くの「教化的講話」(Opbyggelige Taler)と同じく、聖句を中心に展開する。より詳細に言えば、聖句は著作の展開とともにその意味を転義して（アンチ＝クリマクスの考えるところの）正しい意味の提示へと至る。以下、第一巻、第二巻、第三巻とそれぞれ順に考察する。

\*8 本論文は『死にいたる病』において、永遠的なものの範疇に属すると考えられる、信仰、絶望の強まった形態、罪、一貫性、キリスト教を「未知」のものであるとした。しかし、「既知」と「未知」の区別、より正確に言うのならば、「理解すること」と「理解できないこと」の問題はより詳細に取り扱われるべき重要な問題である。それ故、この問題の解決は今後の課題である。

### 第一項 『キリスト教への修練』第一巻 思考実験としての同時性への変化

第一巻の中心となる聖句は、マタイによる福音書 11 章の 28 節、「労苦する者、困難に逢う者、すべて私のところに來なさい。私はあなた方に休みを与えよう」である。第一巻「招き」において、アンチ＝クリマクスはこの聖句を分析し賞賛する。読者はアンチ＝クリマクスと共にこの聖句に賞賛（あるいは感心）することができる。

続く「停止」において、アンチ＝クリマクスは、かの聖句に対する唯一正当な態度を示す。その態度とはかの聖句を告げたイエス＝キリストと同時の立場からの信仰である、すなわち同時代人としてのイエス＝キリストを思い描き、その上で聖句を無条件に受容することである。アンチ＝クリマクスによれば、イエス＝キリストを歴史的知識や諸結果からの推測によって把握することは神を人間に貶める冒瀆であって、聖句の真意を歪めることである。

続いて、アンチ＝クリマクスは同時代人としてのイエス＝キリストの生涯を様々な立場から概観し、その上で同時代人としてのイエス＝キリストが人間悟性にとっての不条理であること、それ故に聖句はただ信じられる以外にないこと、キリスト者とは不条理（神）に対して謙虚になることのみが要求されていること、を示して第一巻を終える。

ここでアンチ＝クリマクスは読者の態度変化を促している。「招き」において、ただ受動的であった読者の聖句に対する態度は叙述の展開と共に、同時代人としてのイエス＝キリストを思い描き、その上で聖句の内容を吟味するという内的行為、言い換えれば思考実験としての能動性を帯びた態度へと変化している。

そして、この変化こそ、アンチ＝クリマクスが第一巻で試みることであることは以下の彼の発言から明らかである。

自己吟味しなさい。何故なら、この事をあなたは許されているからだ。あなたは自己吟味することが許されているのである。（中略）それ故、あなた自身を吟味しなさい——もしあなたが彼 [イエス＝キリ

スト]と同時代に生きていたならば!と。(SV 16, 48)

## 第二節 『キリスト教への修練』第二巻 行為としての同時性—生—への変化

第二巻は信仰に対する反発である「躓き」Forargelse について考察する。中心となる聖句はマタイによる福音書 11 章の 6 節、ルカによる福音書 7 章の 23 節、「私に躓かない者は幸いである」である。

第二巻「調律」において、アンチ＝クリマクスは新たな要素を導入する。それはイエス＝キリストの「無限の悲しみ」である。アンチ＝クリマクスは同時代人としてのイエス＝キリストの状況を描出することに加え、その状況の内にあるイエス＝キリストの内面的な苦悩を描出する。この描出によって、第二巻で中心となる聖句の読者にとっての意味は変化する。この聖句はイエス＝キリストの苦悩から吐き出された、悲しみを含んだ祈りの言葉として読者に迫る。

そして、第二巻 C 付録二において、再び読者の態度変化が促される。アンチ＝クリマクスは以下のように言う。

キリスト者であることの実とは、キリストであることなどではない、(ああ、冒涇!)、それは、キリストの後に続く者であることである。(中略) 後に続く者であることは、人間の生が可能な限り [イエス＝] キリストの生と多くの類似を持つこと、である。(SV 16, 107)

今まで内的行為の範囲にあるものとして示されてきた信仰(キリスト者であること)は、ここでは外的行為を不可避的に伴うものとして明確に提示されている。あるいは、信仰が不可避的に外的行為を伴うものとして明確に提示されることによって、今まで叙述されてきた信仰が内的行為の範囲にあるものであること(あるいは読者がそのように想定していたこと)が暴露される。この信仰の意味の転義には如何なる効果があるか。それは、読者を生へと方向付けることである。第一巻「招き」において、読者は全く受動的であった。しかし、第一巻「停止」において、同時代人としてのイエス＝キ

ストを実験的に想定すること、そしてそこから明らかになる不条理の前で態度決定を促されることによって、読者は能動的になるよう促された。しかし、まだその段階では、読者は生きる方向へと方向付けられてはいない。何故なら、この段階において促される能動性は全て内的なものだからである。そして、第二巻C付録二において、信仰の外的行為の面が強調されて提示される。ここで、アンチ＝クリマクスは読者に、あなたは信仰の生を欲するか、否か、イエス＝キリストの如く生きようとするか、否か、と問いかけるかのようである。読者はこの問いかけに対して肯定的、否定的いずれの返答をするにしても、生きることへと向かっている。何故なら、肯定的な返答はイエス＝キリストのように「生きる」ことを意味し、否定的な返答、すなわちイエス＝キリストの様に生き「ない」という返答は、全く生きようとはしないことを意味するのではなく、イエス＝キリストとは別様に「生きる」ことを意味するからである\*9。

読者の態度は変化し、能動的な生へと方向付けられた。しかし、救いは信仰にある。読者の方向は信仰へと向きを変えなければならない\*10。

\*9 しかし、肯定的であれ否定的であれ、返答はいずれにしても、イエス＝キリストの生涯に対する、ある敬意を含んだものになることは間違いない。何故なら、読者は今までの叙述（あるいは叙述に伴う自らの実験的想定）によって、同時代人イエス＝キリストの苦しみを、全てではないとしても理解しているはずであるだろうから。

また、本文において示した、全くの受動性から内的能動性へ、そして、外的能動性へと読者の態度を変化させる作用は見過ごされやすい。何故なら、イエス＝キリストとの同時性、信仰一躓き、キリスト教界批判という同一の問題が何度も繰り返されるからである。この繰り返しの中で、読者は全てにおいて同じ事が延々と反復されているように錯覚する。しかし、静かに変化は起こっている。そして、読者はいつの間にか生へと方向付けられている。

\*10 第二部の最後の部分である、「躓きの思想的規定」は信仰への変化という意味では、寄与することのない部分である。この部分は、神人は矛盾のしるしであり、その伝達は不可避免的に間接的になること、それ故に信仰は知識の問題ではなく主体的な選択、決断の問題であることが、整然と論じられる。しかし、この部分はそれ以上のものではなく、信仰の消失を嘆くことで終わる。

### 第三節 『キリスト教への修練』第三卷 信仰—愛—への変化

第三卷の中心となる聖句は、ヨハネによる福音書 12 章の 32 節「そして、私がこの地上から上げられるときには、全てを私へと引き上げよう」である。第三卷はこの聖句を冒頭に掲げた、七つの講話から成る<sup>\*11</sup>。以下、講話を順に考察する。

講話 I、II は、基本的に第一卷、第二卷と重複した内容を述べる。聖句を発するのは一人の卑しい身分の男イエス＝キリストである。それ故に、イエス＝キリストを同時代人として想定することは、低さ（卑しい身分の男）と高さ（救い主）の矛盾に直面することであり、選択を迫られることである。そして、選択に直面するとき、人は自由を、すなわち自身が独立した存在であると自覚する。そのうえで人が信仰を決断するためには、罪の自覚が必要不可欠である。

新たな要素が講話 III の途中から進行し、講話 III において読者の態度変化が促される。ここで、講話者はかの聖句を告げた時のイエス＝キリストの苦しい心中を推測する。愛の故に地に来たり、愛の故に迫害され、愛の故に迫害を甘んじて受け、そして徹底的に裏切られるイエス＝キリストの「愛の苦悩」が聴講者に提示される。そして、講話者は以下のように言う。

<sup>\*11</sup> 『キリスト教への修練』第三卷は、この著作の第一卷、第二卷と異なる。この第三卷は、キェルケゴール学士が 1848 年 9 月 1 日金曜日に聖母教会 (Frue Kirke) において行った講話をアンチ＝クリマクスが出版したものである。つまり、この第三卷においては、第一卷と第二卷における執筆者と刊行者の関係が逆転していることになる。それにもかかわらず、第三卷においても、著者アンチ＝クリマクス、刊行者セーレン＝キェルケゴールという形式が維持されている。

ここでは、この奇妙な、しかし間接伝達的手段として複雑な詐術を意図的に用いるキェルケゴールの著作においては同時に意味深長な第三卷の形式的な構成について考察することはしない。本論文において重要なことは、この第三卷が形式的にはキェルケゴール学士による講話である以上、言葉の語り手をアンチ＝クリマクス、言葉の受け手を読者として表記する、本論文の採用してきた表記方法は不適切であることである。そこで、本論文は『キリスト教への修練』第三卷の考察において、言葉の語り手を講話者、言葉の受け手を聴講者と表記する。そして、この聴講者の一人として、本論文執筆者はこの第三卷の叙述を考察する。

そして、この光景はあなたを感動させないだろうか？ (SV 16, 165)

この感動は単なる内的な感動ではない。それは、外的行為へと促す実践に直結する感動である。ここでは、イエス＝キリストの如く現実に生きること  
に直結する感動である。そして、講話者は実践に直結する感動を引き起こす  
ことのない聴講者に向かって、以下のように厳しく言う。

もしこの光景があなたをそのように [実践に直結するように] 感動さ  
せないのなら、それはあなたが彼 [イエス＝キリスト] を愛していな  
いからだ。(16, 172)

アンチ＝クリマクスによれば、救いは信仰である。信仰はイエス＝キリス  
トの後に続くことである。そしてそれはイエス＝キリストに対する愛によっ  
て為される。それ故、イエス＝キリストを愛していない聴講者は救われるこ  
とはない。

講話者が懇念するように、多くの聴講者はイエス＝キリストを愛すること  
ができないだろう。しかし、「今」愛を欠いている者は、「これからも」愛を  
欠いたままで、救われることはないのだろうか。それは違う。今、愛を欠い  
ているからといって、これからも愛を欠いたままでいるということにはなら  
ない。この事情が続く講話 IV において明らかになる。

講話 IV において、講話者は「我々はどこから始めるべきか?」という問い  
を立て、その答えとして、ある青年の例話をする。

青年は想像力をもってある理想像をもつ。そして、その青年はその理想像  
を一途に愛する。しかし、青年には現実の経験が不足している。それ故に、  
まさに現実において青年は挫折を繰り返す。その挫折は青年を強くする。そ  
して、理想像と共に青年は生き、ついに自身では耐えきれぬ苦難に直面する  
ことによって神へと導かれる。

この例話から明らかになることは、愛は生の挫折と苦難と共に成長するこ  
うなことである。つまり、実践的感動に結びつく愛を「今」もつことができ  
ないからといって、「これからも」そのままであるということにはならない。

例え高次の形で愛することが出来なくても、今、できる範囲で一途に愛し続けければ、世を導く力によって愛は強められ、そして救いに結びつく愛へと展開する。

この例話によって聴講者の態度は変化する。聴講者は生における愛の過程を通観して、自身の位置を見定める。そして、今、すべきことを、すなわちいつの日か救われるために、今、懸命に愛すべきであることを感得する<sup>\*12</sup>。

残る三つの講話、講話 V、VI、VII によって、講話者は聴講者を自身から切り離す。

真理は生きることにあり、生きることから離れた知識は虚偽である。各人はそれぞれ自身の生を生きなければならない。真理においては進化というものはなく、選択、決断の過程は同一のまま各個人の前にあり続ける。

以上のことはこれまでの講話を踏まえれば承認することができる。しかし、講話者はこのことを当時のキリスト教界に対する激しい批判において展開する。その、あまりに個別具体的でかつ執拗に反復される過激な言葉は聴講者を講話に対するコミットメントから遠ざける。つまり、ここで、聴講者は講話者から離れる。そしてそれは講話者の望むことである。何故なら、まさに講話者が、真理は各人がそれぞれ生きるこの内のみあると言うのであるから<sup>\*13</sup>。

以上、『キリスト教への修練』を読者との関係を配慮して考察した。この考察から理解されることは、『キリスト教への修練』が読者の態度変化を促し、一途に愛する自己固有の生を生きることを促す著作である、ことである。

<sup>\*12</sup> この部分の解釈は、誇張的にみえるかもしれない。確かに、この解釈は主観的に傾きすぎた見解ではあるだろう。しかし、このような解釈を許す力をこの例話は持っている。

<sup>\*13</sup> 我々は講話者から離れる。しかし、孤立するのではない。我々は講話者の理念を理解し、受け入れる。しかし、それを展開する場からは離れる。講話者と聴講者は互いに無関心的に孤立するのではなく、また無反省に合一するのでもない。講話者と聴講者は、共通しつつも区別されて、本当の意味で「関係する」のである。

また、講話者は聴講者を切り離すといっても、講話 VII の最後において、すなわち『キリスト教への修練』の最後において、講話者は全ての聴講者が躓くことなく神へと導かれるように祈る。ここには、各人の外的内的環境は相違するが他人を思いやる祈りは普遍的であることが表現されている。つまり、他性との関係は普遍的である。

## 結論

以上、アンチ＝クリマクスによる二つの著作を絶望の治療という観点から考察した。『死にいたる病』において、読者は既知と未知の狭間で動揺しつつ未知へと謙虚に向かうこと、すなわち永遠的なものへ向かって恐れと共に生きることを学んだ。続く『キリスト教への修練』において、読者は永遠的なもの（キリスト教）に対して受動的な態度から能動的な態度をとることを学び、永遠的なものに対する究極的能動的態度へと自身を高めるために自己自身の生を自覚的に築き上げていくことを学んだ。つまり、『死にいたる病』と『キリスト教への修練』を通して、読者は永遠的なものへと向かう生において上昇した、具体的に言うと神であると同時に最も苦悩した者であるイエス＝キリストを愛することができるために、今、ここにいる自分が愛しうる他のものを、一途に愛することを感じた。

他のものを一途に愛することのみが絶望を克服する。何故なら、アンチ＝クリマクスによれば、全ての絶望（罪）の原因は我執にあるからであり、この我執を打破し克服しうるものは自己の中心を他のものに移すこと以外になく、そして他のものを一途に愛することこそ、この自己の中心の移行を最もよくなし得ることだからである。そして、上記のように、アンチ＝クリマクスの著作を通して、読者は愛の生を歩む心構えを感じた。

つまり、愛の生を促すことによって、アンチ＝クリマクスは読者の絶望を治療しているのである<sup>\*14</sup>。

## 主要参考文献

Alastair Hannay and Gordon D. Marino, eds., *The Cambridge Companion to Kierkegaard*, Cambridge University Press, 1998.

<sup>\*14</sup> キェルケゴールの著作が読者に「愛の種」を植え付ける効果もあることを、本論文執筆者は中里巧氏の講義を通して知った。

Michael Theunissen, *Kierkegaard's Concept of Despair*, trans. by Barbara Harshav and Helmut Illbruck, Princeton University Press, 2005.

Roger Poole, *Kierkegaard: The Indirect Communication*, University Press of Virginia, 1993.

大谷長、『大谷長著作集』第一巻、第三巻、創言社、2003。

國井哲義、『苦悩と愛：キェルケゴール論』、創言社、2002。

中里巧、「悪魔的絶望と覚醒」、『理想』第676号、理想社、2006。

山下秀智、『宗教的実存の展開—キェルケゴールと親鸞—』、創言社、2000。

(ゆくたけ ひろあき)